

大阪

あーかいぶず

大阪府公文書館のある住吉地域の歴史や環境を回想して

村田保

平成九年三月
第二十号
大阪府公文書館発行

目次

大阪府公文書館のある住吉地域の歴史や環境を回想して	1
収集資料の紹介	3
大正時代の工業発展	4
江戸時代の結婚式	7
所蔵史料展のお知らせ	10

■大阪府公文書館のある地はご存知の通り、大阪市南部の阪堺電車上町線の帝塚山三丁目駅附近で、熊野街道の東に接し、館の西には上町線と南海電鉄高野線を越して帝塚山古墳があります。東には万代池公園を前景して眺める府立病院の前を府道あべの筋(通称十三号線)が走っており、その路は住吉村誌では村内最古の大道で、「古代高津の宮と住吉津を結んだ」跡だと伝承されています。南へ少し足を伸ばすと、住吉大社から喜連へ延びる雄略時代の磯津津路(住吉街道)があり、そこは住吉大社の森も近いのです。館の附近には現在、屋敷町が並び、大阪でも有数の高級住宅街が続いています。

館はまさに古代の歴史と緑一杯の池面を持つ公園と閑静な町に包まれた地にあります。

しかし、この地もやはり、大きな歴史の変遷が繰り返されてきた所でもあります。



大正14年4月、大阪市に合併時の「東成郡住吉村全圖」(住吉村常盤会所蔵)

■歴史を回顧する時、住吉の昔は遠く、海の神和歌の神として全国的に崇敬厚い住吉大社の鎮座、そして日本最初の文物の輸入のあった住吉津の大津時代、墨江中つ王の王権の争い、大伴金村の住吉への隠退の件から、八十島祭赤染衛門の住吉社参、貴族の熊野詣でと続く間は平和でありましたが、王権との関係が蘇がえった住吉行宮の南北朝時代から、この地は戦乱の渦中に巻き込まれました。続いて、応仁の乱を経て畠山一族、細川一族の家督争いのため、再び兵馬の抗争や劫掠に犯される処となり、なお、石山合戦や大坂冬の陣・夏の陣の戦には、激甚の追打ちの戦火をかけられて村落は荒れ果て人々は窮迫しました。徳川期に入り、村は漸く平和となりましたが、一般人は夜盗の出没する上町台地の村内を避け、西崖下の紀州街道を往来したので、村は益々寒村となったのです。

■明治に入って村収入の主役を果たす神社々頭の長峽地区が村から分離する事が起った時、村は財政的に独立存続を危ぶまれました。そのため、村の幹部達は、日夜会合を続けこれが打開策に深く知恵を絞ったのです。

その結果、窮極創案されたのが「都市計画」による起死回生策です。それが、帝塚山地区を「耕地整理」によって別荘地として作り替えることでありました。この事業は交通の発展と、理想的住宅地を求める大阪市内の中産階級以上

の人々の願望をとらえ、使用不良の低廉であった高燥地は絶品の華に改変させられました。

そして、それによる村税の高収入所得は、村内産業の発展努力とともに、村の財政に著しい貢献をしました。



現在の御文庫（住吉村常盤会提供）

警備の完備に全力をあげました。それにもかかわらず、村は村民に対する直接的税負担が非常に軽微でした。

■特に、村の事業中、最重要の重点施策は教育の発展育成でした。

例えば、府内中、最高級の給与で雇用した教師を持つ村立小学校や幼稚園を創立させました。なお、村域には、村は私立帝塚山学院、国立大阪高等学校（大阪大学の前身）、府立女子専門学校（大阪府立女子大学の前身）、府立住吉中学校（府立住吉高等学校の前身）などを誘致し、現在の上町台地南部の文教地区の基礎造りをしました。現在、このあたりは大阪府立女子大学を経て、移転のあと、跡地に昭和五三年、大阪府立看護短期大学が開校し、その一部を利用して昭和六十年より大阪府公文書館が開館、平成六年、看護短期大学移転のあと、住吉警察署が仮庁舎として平成七年より使用しているほか、大阪府立貿易専門学校、私立万代幼稚園、私立帝塚山学院などが立ち並び、その当時の面影を今も受け継いでいます。

かくて、この精神は今でも深く受け継がれており、日本の図書館の始祖の一つとも云われる住吉大社「御文庫」を旧村内に持つ吾々住民にとっては、この地に育ちつつある大阪府公文書館の未来発展に大いに期待しているところです。

（むらた たもつ 住吉村常盤会理事）

その成果として、明治三二年長峽地区が分離

してから、大正十四年大阪市へ合併する迄の約三十年余の間に、村は大阪周辺の東成郡西成郡四十四町村中、最低の貧村から最高の富裕村に大変化したのです。村はその過程中、教育衛生

収集資料の紹介

平成8年度に収集した資料の中から、その一部を御紹介します。

これらの資料の過去のものも保存していますので、どうぞ御利用下さい。

資料名	頁数	概要	要
おおさかの環境	33	大気汚染など都市・生活型公害や、廃棄物問題などの現状とそれに対する対策を紹介している他、河川環境や公園・緑地の整備など自然と共生する環境事業を紹介している。	
縮刷版	268	平成6・7年度に発行された『府政だより』『週間ふちょう』『広報おおさか』『企画広告』『全国地域情報発信共同事業』『緊急広報』『文字放送』を縮刷して1冊にまとめている。	
平成7年度大阪府中小企業経営指標	87	中小企業の方々に対する情報提供事業の一環として、府内の中小企業の最近1年間の経営活動の状況を計数的に把握し、これに基づいて業種別、従業員規模別に経営指標を作成したもの。	
大阪府青少年白書	378	3部構成でまとめられている。1部では「青少年と文化活動～プラネットステーションに集う若者たち～」をテーマに、青少年育成における文化活動の課題と方向性を述べており、2部では「大阪の青少年の現状」、3部では「青少年に関する施策」を掲載している。	
ボランティア活動ガイドブック とびらをあけて ～ふれあいと感動のシナリオ～	53	ボランティア活動に携わっている方の感動体験を多くの方に体感してもらうためにその体験談を執筆してもらい、これを紹介している。また、ボランティア活動に関する基本的な事項をQ&A形式でまとめ、ボランティアへの理解を推進している。	
府税のしおり	80	府税の概要やその重要性について、理解を深めていただくために作成されたもので、府税・国税・市町村税ごとにそれぞれの税金のしくみや使われ方などについて解説している。	
平成7年度 府政モニター通信の概要	67	府政の主役である府民の皆さんに「府政モニター」を依頼し、ご意見・ご提案などをいただいている。この冊子ではその「生の声」を紹介するとともに、その主なものに対しての府からの回答を掲げ、取りまとめている。	
平成6年度 大阪府の一般廃棄物	67	平成6年度における府下の一般廃棄物処理事業の概要を取りまとめている。	
暮らしのための手続案内	328	府営住宅の入居申し込みやパスポートの申請など、各種の手続の内容、資格、受付期間、窓口、提出書類等を部同ごと課単位でわかりやすく揭示している。	
大阪府交通事故相談概要 平成7年度	20	平成7年度に大阪府で取り扱った交通事故相談の概要を表やグラフを用いて解説している。	
「子ども議会」(記録誌) ～平成8年8月～	49	平成8年8月に行なわれた「子ども議会」での、子どもからの意見、それに対する知事の答えが記録されているほか、開催模様を写真で紹介されている。	
再就職ガイドブック ～再就職をめざすあなたに～	42	再就職を希望する女性を対象に作成されている。I章では再就職をするにあたって、求人票の見方や履歴書の書き方、面接の受け方などの基礎知識を説明している。II章ではよりよく働き続けるために、仕事と家庭の両立、職場と人間関係などが記されている。III章では働くときに知っておきたい法制度や知識をわかりやすく解説している。IV章では労働事務所やレディスハローワークなどの関係施設が紹介されている。	
大阪府環境白書 平成8年版(1996年)	380	府議会に提出した「平成7年度における環境の状況並びに豊かな環境の保全及び創造に関して講じた施策に関する報告」を中心に環境白書として取りまとめている。第1部では大気環境や水環境などの現状をわかりやすく解説しており、第2部では大阪府が豊かな環境の保全及び創造に関して講じた施策を説明している。	

大正時代の工業発展

— 大阪府を中心に —

高倉史人

■ はじめに

現在、阪神工業地帯は、京浜工業地帯・中京工業地帯について全国第三位の工業製品出荷額をあげており、その中心である大阪には、電気・機械・金属・化学・繊維・食料品など多くの工業があります。そして、これら大阪にある工業の多くが近代工業としてその基礎を固め、大いに発展したのは、大正時代、特に大正三年（一九一四）から七年（一九一八）にかけて争われた第一次世界大戦の頃だったといえます。

ところで、大正時代の大阪の工業について、当公文書館には、『雑書綴』（明治四一年〜大正一二年）、『大阪府会要書類』（大正八年〜九年）、『大阪府治要覧』（大正期）、『大阪府会速記録』（大正期）、『大阪府統計書』（大正期）などが保存されています。

そこで、本稿では、これらの文書から、第一次世界大戦の頃を中心に、わが国と大阪の工業がどのように発展したのか。また、このような工業の発展をバックアップするために大阪府はどのようなことを行ったのか、述べてみたいと

思います。



大正時代の大阪市内（『大阪府写真帖』より抜粋（小島誠氏より寄託））

■ わが国の工業発展

大正三年七月二八日、ヨーロッパを戦場として第一次世界大戦が始まり、イギリス・フランス・ロシアなどの連合国側とドイツ・オーストリアなどの同盟国側が四年あまりにわたって戦いました。この戦争は、大正時代の日本の工業に大きな影響を及ぼしました。

当初は、戦争によって通商が混乱したために景気は下降していましたが、大正四年後半以降に急速な上昇に転じました。そして、この景気が造船、海運、薬品、兵器製造、染料、さらには紡績、織物などあらゆる業界に及んだ結果、工業生産額は飛躍的に伸びました。例えば、第一次世界大戦をはさむ大正三年と八年の間に、工業生産額は約五倍となり、総生産額に占めるその比重は四四・四％から五六・八％となりました。

このように工業生産額が伸びた原因として、日本が実質的に戦局外であったこと、今までヨーロッパの市場であったアジア・アフリカ・アメリカ・オーストラリアなどへの商品の輸出が拡大したこと、輸入の途絶によって国内工業に発展の機会が与えられたことなどがあげられます。

また、政府が大正四年六月一九日に「染料医薬品製造奨励法」（法律第一九号）、大正六年（一九一七）七月二四日に「製鉄業奨励法」（法

律第二七号)などを制定して、工業の促進・保護を図ったことも原因のひとつとして考えられます。

前者は、ドイツからの輸入途絶への対策として、染料や医薬品などの製造会社に対して、政府が十年間年八分の利益配当を保証することを規定しており、後者は、製鉄会社に対する免税と優先的な土地収用・使用などを規定していました。

■ 大阪の工業発展

大阪においても、大正四年(一九一五)から八年(一九一九)にかけての戦争景気によって、工業生産額が増加し、各種会社・工場の新設が行われ、職工数も増加しました。このことを示したものが次表です。

この表から、大正四年と八年を比較すると工業生産額は約三・五倍増の一三億四千万円弱となり、工場数は二、〇四六から二、九六九に、職工数は一二六、三五二人から二〇四、五二二人へと七八、一六九人も増加しています。

また、当時の大阪港での外国貿易額を『大阪府統計書』より見てみると、輸出額において、大正四年は、九三八二万余円であったのに対して、大正八年は約四・七倍増の四億三八八三万余円になり、一方、輸入額においても、大正四年は五〇六〇万余円であったのに対して、大正

八年は約三・三倍増の一億八七六万余円になっています。

表 工業生産額・工場数・職工数の推移

	工業生産額(円)	工場数	職工数(人)
大正4年	381,305,907	2,046	126,352
5	672,823,881	2,438	162,539
6	787,086,477	2,504	164,254
7	1,377,357,768	2,673	182,654
8	1,339,794,534	2,969	204,521

『大阪府治要覧』、『大阪府統計書』より作成。工場数と職工数は10人以上の職工を使用する工場を対象とした。

具体的には、綿織物工業において、大戦によってイギリスやアメリカの綿布に代わって対中国輸出が可能となり、さらにインド・南洋までの道が開けたことなどによって生産が激増しました。なかでもタオルは、泉南郡佐野町(現泉佐野市)を中心に中河内郡及び泉北郡で機械化と輸出の好況に伴い多量に生産されました。

また、造船業において、大戦中、世界的な船舶不足のためヨーロッパ諸国からの需要が激増

し、藤永田造船所や大阪鉄工所などの大会社のほかに、多くの造船所が安治川・木津川・尻無川沿岸に立ち並び、活況を呈しました。金属工業では、ドイツ製品の輸入困難から、日本へ注文が殺到したために関係工場の拡張や新設が続出しました。そして、住友鋼所の拡充、大正六年の合資会社大阪伸鋼所及び湯浅伸鋼所などの専門メーカーの創業がみられました。

さらに、化学工業においても、医薬品製造は、戦争による輸入途絶と、前述した「染料医薬品製造奨励法」の制定を機に成長し、武田・塩野義・田辺など、大阪を本拠とする大製薬会社がその基礎を固めたのはこの時期でした。

以上のべましたように、大阪の工業は第一次世界大戦中の大正四年から八年にかけて発展しました。それでは、次に、このような大阪の工業発展をバックアップするために大阪府はどのようなことを行ったのか述べてみましょう。

■ 大阪府の対応

大正時代を通して見てみますと、大阪府は、まず、大正三年(一九一四)四月、近代工業に関する知識・技術を持った職工をより多く養成するために今宮職工学校(府立職工学校分校・現今宮工業高校)を創立しました。また、大正一二年(一九二三)一二月に、商工業者に相互交流の機会を与え府下の実業の発達に資する場

所として実業会館を、大正一四年（一九二五）五月に、産業能率の調査・研究・指導・試験・検査などによって産業能率の増進に寄与する機関として産業能率研究所をそれぞれ建てました。さらに、大正三年から一二年にかけて、船舶航行や物資運搬の円滑化を図るために尻無川・木津川・中津川の改修工事などを行いました。そして、これらによって大阪の工業発展をバックアップしようと思いました。そこで、この中から、今宮職工学校について述べてみたいと思います。大阪府は、大正元年（一九一〇）一月二八日の通常大阪府市部会において、「職工学校費」（職工学校分校設置費）として一九、九五六円を提案しました。

この提案理由は、現在、工業地として発展している大阪にとって職工の養成が最も重要である。そのためすでに、明治四一年（一九〇八）に府立職工学校（現西野田工業高校）が創立されているが、「益々之レヲ拡張シテ此ノ工業地ノ中心タル所ノ大阪ノ将来ノ発展ニ資スル」ために府立職工学校の分校を設けたいということでした。

そして、この案が審査委員会に付された結果、実習のための設備充実と敷地拡大が必要であるという委員会の意見により三九、五〇七円増額した五九、四六三円の費用が認められ、可決されました。

次いで、大阪府は、大正二年（一九一三）一月二六日の通常大阪府市部会において、校舎の建築費約一二万円（大正三年度と五年度の継続費）を提案し、二月二六日に可決されました。

そして、大正三年四月に府立職工学校の分校が創立され、大正五年（一九一六）四月には独立して「大阪府立今宮職工学校」となりました。

この職工学校は、大正六年五月七日の「大阪府立今宮職工学校学則」（大阪府令第三五号、全三二条）によると、その第一条で、「本校ハ徒弟学校規程ニ依リ工業上ノ実技ニ従事セントスル者又ハ従事スル者ニ必須ナル智能技能ヲ授ケ且其徳性ヲ涵養シテ常ニ他ノ模範タルヘキ善良ナル職工タラシムルヲ以テ目的トス」と規定して、近代工業に関する知能・技術を持った職工の養成を明確な目的としていました。

また、この職工学校には、昼間部（建築科・印刷科・電気科・鑄工科・仕上科、二五五名、修業年限三年）と夜学部（機械科・建築科・電気科、三〇〇名、修業年限二年）が設けられており、昼間部の生徒には「全課程修了後一ケ年間学校指定ノ地ニ於テ自営若ハ工場ニ就キ便宜実地ノ練習ニ従事スルコト」として、工場などでの実習が課せられていました。

その後、大正六年二月二八日開催の通常大阪府市部会で、昼間部に木型・鍛工の二科の増設に関する予算が認められ、大正七年二月二

八日開催の通常大阪府市部会で、入学志願者増加に対処するために夜学部の定員三〇〇名を四五〇名に増員することに関する予算が認められました。

この結果、優秀な職工が多く養成され大阪の工業発展に貢献したのです。

■ むすびにかえて

以上のべましたように、大正四年から八年にかけて、大阪の工業が発展し、大阪府も職工学校の増設・定員数の増員、河川の改修工事などを行って、それをバックアップしてきました。しかし、このような大阪の工業発展も大正九年（一九二〇）春に起こった株式の暴落による戦後反動恐慌以後は低迷を続け、繊維・造船・化学工業などが大きな打撃を受けました。そして、激動の昭和期を迎えるのです。

【参考文献】

- ・『大阪百年史』（大阪府、一九六八）
- ・『大阪府教育百年史』第一巻、第四巻（大阪府教育委員会、一九七三、七四）
- ・『大阪府の百年』（小山仁示・芝村篤樹、山川出版社、一九九一）
- ・『第二章第三節 工業都市化の進展』（武知京三執筆、『新修大阪府史』第六巻、大阪市、一九九四）

江戸時代の結婚式

川中家文書より

田母神 克 幸

●はじめに

寒かった冬も過ぎ、暖かな春の訪れが感じられると人々の心は次第にわきたち、あちらこちらで諸々の行事が行われるようになります。なかでも陽気な春には、人生最良の儀式である結婚式が処々で実施されます。

そこで今回は、江戸時代の結婚式の様子を当館所蔵の川中家文書から覗いて見ることにしましょう。史料の古文書を残された川中家は代々、河内国今米（現在の東大阪市今米）の庄屋でした。このような豪農の結婚式はどのような行われていたのでしょうか。また当時の婚礼にはどのようなしきたりがあったのでしょうか。「ゴージャス結婚式」から「ジミ婚」と呼ばれる簡素な結婚式まで、多種多様な結婚式が行われる現代と、当時の結婚式を比較してみるのも、江戸時代を理解する上で、ひとつの参考になるのではないのでしょうか。

●結納

現在の結納の式は、婚約が整った証明として、



見合の図『絵本栄家種』より（大阪府立中之島図書館蔵）

婿・嫁双方の家から金銭や織物・酒肴などの品物を取り交わす儀礼のことですが、江戸時代の庶民のあいだでは、「酒入れ」「樽立て」などと称する酒肴のやりとりと、共同飲食の方が、主

とした婚礼儀式で、むしろ金品の贈答はこれに付随したり、祝言の日に行われることが多かったようです。そこでこの酒肴の嫁方での共同飲食を「結納」とか「結入れ」などと称していました。



結納の図『絵本栄家種』より（大阪府立中之島図書館蔵）

そこで江戸期に出版された儀礼書の中から、当時の中級武家や町人の結納の方法を述べてみることにしましょう。まず双方の縁が決まると吉日を選び、一般には婿方が日取りを決めて使

者を嫁方に派遣して、結納の品に目録を添えて贈ります。結納の使者は、仲人、親族などに依頼して袴などの晴れ着を着用して、使者は嫁の家に赴き、進物を並べて口上を述べ目録を渡します。受け取った嫁方からは受取書を出して、この後、進物を床の間などに飾り、使者に対して礼を述べ饗応の膳を振る舞いました。以上が江戸期の結納儀式の一例です。

また当時結納に持参する進物は五荷五種・三荷三種・一荷一種などと呼ばれていました。荷は酒を種は肴を指します。肴は昆布・鰯・塩鯛・串鮑・鰻などで、荷は一对の酒樽のことです。その外には小袖一重（一つは裏表共に白・一つは表が紅で裏は何色でも可）を一反ずつ板物包（板を芯にして平面に畳む包み方）にして水引を掛け、帯一筋を必ず添えました。

但しこれらの進物には、婿の分限に応じた格差があり、進物の員数に真・行・草の格付けがなされていましたが、これらの格付けは、双方の事前協議で決定されるのが通例でした。

さて、本題の川中家文書を見ますと、年代を特定することはできませんが、結納の際に両家間で交わされた覚書きが残っており、結納の進物や膳部の様式などを知ることができます。

結納の進物に関しては、「一 三荷三種も本式二者不仕候、樽も平樽ニいたし、角樽二者無御座候、三種は饗節一箱昆布一臺、塩鯛一

臺ニ仕候、右ニ小袖一重、帯地相添差遣申度候」とあり、仲人の装束は、「但、仲人幸領兩人、羽織袴ニ而麻上下着用不仕候」としており、略式で行われたものと考えられます。

また、「一 結納之節雑煮ニおよび不申候、膳一汁三菜膳之上酒三献ニ而御濟被下、祝義者幸領百疋、小者銀六 宛」とあり、結納の際に一汁三菜の膳部と、酒が出され、そして幸領と呼ばれる荷物の運搬監督人とそれに従う小者に対しては、祝儀の金銭が出されていました。

● 祝言

結納が済むと、吉日を選んで祝言が行われます。

祝言の日になると、婿の家では一族が集合して夕刻まで祝宴が行われます。婿方は早く嫁を迎えることを喜びとし、また嫁方は遅く行く事を誇りにしていたので、婿方からの再三の督促で、夕刻から夜に及んで、嫁入りが多く行われました。

また、嫁入道具は嫁入りに先立って、婿方に運び込まれました。江戸期には、これらの道具を婿方の家で「道具飾」と称して嫁の居間に飾り、親族などに披露しました。

川中家文書の中にはそれら嫁入道具の詳細を記した『入日記』が残されています。これによると小袖・帷子などの衣類が八九点、布団・蚊



祝言の図『絵本栄家種』より（大阪府立中之島図書館蔵）

帳類九点、蒔絵・黒塗の硯箱・文箱などの道具類四四点、提灯・傘などの荒道具四点、乗物一点でその総数は一四七点にもなります。

とりわけ小袖類は数が多く、また布地の種類も、「一 花色縞子小袖」や「一 紅花色紋縮緬小袖」などと書かれているように、金襴・緞子・縞子・縮緬・毛織・更紗・紗綾・麻・絹・紗と多種に及んでいます。これらの布地は当時大変な高価な品であり、この『入日記』からは、

このような衣類を嫁入道具として持参させることとの出来る家から嫁を娶った、川中家の格式の高さを知ることが出来ます。

さて、嫁は乗物（屋根や引戸のついた高級仕様のものを指し、庶民が使用した粗略なものを駕籠と称した）で到着し、祝言の席に着きます。続いて婿が席入りし、嫁の綿帽子を取ります。祝膳には熨斗鮑、搦栗など、式正の献立が三方に並び、三三九度の盃事があります。それを終えると「色直し」が行われます。「色直し」以前は厳粛な婚礼儀式ですが、それにより以後はくつろいだ祝宴となります。婿が礼服を脱ぎ、嫁が白無垢から「色物」といって赤地の衣類に改めることから「色直し」の名があります。この色物は、婿から嫁へ贈られました。



色直しの図「絵本栄家様」より（大阪府立中之島図書館蔵）

婚礼が済むとその翌日から「部屋見舞」といって、嫁の母親や親族の女性たちが土産を持って

嫁に面会に来ます。これは、当時婚礼には主に男性の客が出席し、女性が参列しなかったことから起こったのだと考えることができます。しかし川中家文書の中には「一 部屋見舞之儀一家共 身内とも無用ニ可仕候、自然部屋見舞到来□部屋之祝儀應シ而其砌差図可仕候」とあり、部屋見舞を省こうとする様子がわかります。これは双方の手数・費用を節約する目的であったと考えられます。

この部屋見舞いを経て、嫁は一旦里帰りをし、嫁は二三日実家に滞在した後、婿家に戻り、一連の婚礼儀式はこれで終了することになります。

● ま と め

史料の書かれた江戸時代は、太平の世情の中でさまざまな儀礼文化が発展した時代であり、結婚儀礼についても多数の儀式書が刊行されました。それには各家の分限（家の財力）に応じた結婚儀礼の違いが述べられておりますが、川中家でもそれに沿って家同士で協議決定されたといえましょう。

当時の社会生活は町や村などの共同体を中心として組織されており、そのなかで結婚は社会通念上、家同士の結びつきとして考えられていました。当時の結婚では両人の親愛の情を第一義とするというよりも、それ以上に家同士の

約束によって共同体組織の一員となったことを自覚させる目的があったのではないのでしょうか。

なお、文中で使用しました史料は、『大阪府公文書館所蔵史料展川中家文書に見る江戸時代の冠婚葬祭』平成九年五月十二日（火）～六月十三日（金）に出品する予定です。

多数の御来館をお待ちしております。

【参考文献】

・江馬 務 「結婚の歴史」『江馬務著作集』第七巻 中央公論社 昭和五十一年

・近松真知子 「大名の結婚―変遷・法令・縁組・結納・輿入・婚礼・献立―」『徳川美術館蔵品抄7 婚礼』徳川美術館 平成三年

・原田伴彦・芳賀登・森谷尅久・熊倉功夫 『図録生活史辞典』 柏書房株式会社 昭和五六年

（たもがみ かつゆき 大阪府公文書館）

大阪府公文書館所蔵史料展のお知らせ

大阪府公文書館では『川中家文書に見る江戸時代の冠婚葬祭』と題して所蔵史料展を行ないます。

人間は人生を歩んで行く課程で、成人・結婚などさまざまな「ふしめ」を迎えます。そしてそのふしめごとにそれに応じた儀式を行ってききました。

「人生儀礼」または「通過儀式」と呼ばれるものです。

そこで今回、江戸時代の人々がこれらの儀式をどのように行い、また、記録していたのかを館蔵品の川中家文書から展示して、当時の儀礼文化の一端をかいま見ていただこうと思います。多数のご来館をお待ちいたしております。

◎と き 平成九年五月一二日(月)～六月一三日(金)

ただし土曜日・日曜日・五月三十日(月末休館日)を除く。午前九時一五分～午後五時

◎ところ 大阪府公文書館 二階展示室

なお、駐車場はございませんのでお車でのご来場はご遠慮ください。(身体障害者の方用の駐車スペースはございます)

編集後記

▼寒い日が続いた冬もそろそろ終わりを告げ、春の訪れを感じるようになりました。今回は「大正時代の工業発展」と題して、大阪の工業が発展した頃の様子を紹介しましたが、不景気の続く現在、こちらの冬も早く春になってほしいものです。

▽春になれば、入学式、入社式、あるいは結婚式と人生の節目を迎える「儀式」が多々あります。今回はその中のひとつである結婚式を「江戸時代の結婚式」と題して、取り上げました。「温故知新」という言葉にもあるように昔を振り返り、今後の参考にしてみたいかがでしょうか。



モッピー

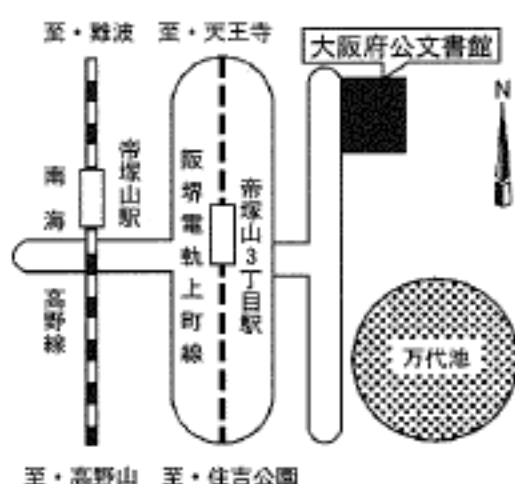
利用案内

■開覧時間

・月曜日～金曜日 午前9時15分～午後5時

■休館日

・土曜日、日曜日、祝日及びその振替休日
 ・年末年始(12月28日～1月4日)
 ・毎月末日(土曜日の場合はその前日、日曜日の場合はその前々日)



最寄駅 阪堺電軌上町線帝塚山駅3丁目(徒歩3分)
 南海高野線帝塚山(徒歩6分)

大阪あーかいぶず 第二十号

平成九年三月三十一日発行
 編集発行 大阪府公文書館
 大阪市住吉区帝塚山東二丁目一四四
 電話 〇六一六七五―五五五―
 FAX 〇六一六七五―五五五―
 印刷 大阪府営印刷所